

全国専門学校 青年懇話会

第26回経営戦略セミナーレポート

(学)西野学園 理事長

前鼻 英蔵

平成28年11月24日～26日 (東京・TKP新橋カンファレンスセンター)

「全国専門学校青年懇話会とは」

全国の専門学校の若手幹部、次世代経営者の会で、50歳未満の方対象（超える方も参加している）。これからの経営に必要とされる知識の習得、情報交換、疑問解消と同時に、全国に跨がる人的ネットワーク作りを目的としている。年に1回の本大会と数回のセミナー開催を中心に活動している。なお、故大森厚中央工学校理事長の発声により26年前、軽井沢のセミナーハウスに約30名の若手経営者が集まったことから発足した。

今回で26回を迎える本セミナーは、次代の専門学校経営者及び経営の一翼を担う方々を対象として、毎年秋に2泊3日の日程で開催しています。

昨今の教育環境の中で、専門学校が抱える諸問題について解決の糸口を探る研修として、昨年度までに全国から延べ940名に参加いただきました。設置分野が多岐にわたる専門学校では、学校間の情報交換が容易ではありません

が、本セミナーで共に研鑽した経験は、その後のネットワーク形成に大いに役立つとの声を多くの参加者からいただいています。

今年は会場を東京として、54名の参加者を得て開催されました。近年、西日本からの参加者が4分の3以上を占め、若手の台頭が西高東低の傾向になっているので、東からの参加者が増えることを期待しているところです。

今年は、今後の教育の方向性や事業継承、最新の人事について学び、活発な意見交換や議論が深夜までなされ、多くの知見を得て終了しました。その様子をレポートします。

セミナー一日目

開講式では、小林光俊全専各連会長と、開催県を代表して山中祥弘東京都専修学校各種学校協会会長よりご挨拶をいただきました。若手への期待がヒシヒシと伝わる激励のお言葉に、皆、気が引き締められました。

はじめに、基調講演として、東京大学大学院教授 鈴木寛先生より「高大接続改革と職業教育」をテーマに、今後の高等教育の方向性についてお話いただきました。我々高等教育機関を取り巻く環境は大きな変革期にあり、現在、審議が進んでいる大学入試改革並びに専門職大学の新設から今後予測される高等教育機関を取り巻く環境の変化（変革）まで、拝聴することができ非常に有意義な時間でした。特に、AI や ICT の発達により今後 30 年で代替ができる職種・できない職種各 100 種の一覧が出された時は会場から驚愕の声が起きました。抽象的な概念を整理・創出するための知識が要求される職業、他者との協調や、他者への理解、説得、ネゴシエーション、サービス志向性が求められる職業は、AI 等でも転換が難しいという事でした。そのためにも、教育の現場では、先行き不透明な将来性を見据え、想定外を生き抜く人材の育成、科学技術の可能性と限界を理解し、それらを活用制御できる力、新たな社会課題に向き合うための学識と方法と特徴が必要だと述べられました。さらには、AI により職業が変わるため、それに対応する教育は一体何かを考える必要があると述べました。

続いて、株式会社タナベ経営の若松孝彦社長から、100 年続く企業というのはどのような体質なのか、講演をいただきました。若松社長は、様々な企業の事業継承に関わった経験から、私たちに、『永続する学校や企業をつくるという

ことは組織を如何につくるかということ』、『経営とは学校も企業も業種や業界で分け隔てることはなく原則として共通していること』など、シンプルで強いメッセージをくださいました。

参加者からは、私たち学校経営に携わる若手にとって後継者としてやるべき事が明確になったという声を多く聞きました。また、学校経営も企業的志向を持つことの大切さ、変革の重要性、事業だけでなく組織も継承しどのように発展していくのか、そのプロセスをどう考えるか、という点でも貴重な講演となりました。参加者の目が期間中一番鋭く真剣になり熱心に聞いていましたし、講師からも目の色が違うという言葉をいただきました。

夕食を取りつつ懇親会、2 次会では分科会形式に変えて議論しました。

分科会は班ごとに日々の疑問など、専門学校経営に関わる者同士活発な意見交換を深夜まで繰り広げました。

セミナー二日目

二日目の第一講は、文部科学省専修学校教育振興室白鳥綱重室長から行政報告、続く第二講は、菊田薫全専各連事務局長の「専門学校・各種学校の課題」、このテーマについてお話いただきました。

昼食後は、三菱 U F J リサーチ & コンサルティング株式会社の小池陽二郎氏から、「～労働市場・労働行政の変化への対応～人事マネジメント高度化の考え方・進め方」をテーマに、再雇用契約の変更点、労使紛争予防等について学校法人が取るべき対応について事例を交えてお話いただきました。特に平成 30 年度から始まる有期雇用の契約問題については、各法人とも今から準備が必要だということを参加者は痛感しました。

株式会社進研アド専門学校営業部の深堀雅樹部長から、「円滑な高専連携に向けて～初年次教育に求められることは何か?」と題して、昨今の高校生を取り巻く環境と、初年次教育の重要性について、講演をいただきました。特に進

研模試の全国平均がここ数年低下していることから、大学も含めこの取り組みが募集活動にも影響している旨の話がありました。

二日目も夕食を取りながらの懇親会・分科会を行い、意見交換を行いました。

セミナー三日目

最終日、青年懇話会会長前鼻より、オーストラリア（以下「豪州」）の高等教育機関 Technical and Further Education、（以下「TAFE」）の視察旅行の報告を行いました。

私たちは、6月8日から10日までの日程で、青年懇話会会員有志25名とともにシドニーにあるTAFE NSW（New South Wales、ニューサウスウェールズ州）のThe Northern Sydney Instituteの3つのキャンパス（St Leonards Campus、Ryde Campus、Meadowbank Campus）を視察しました。

今回、株式会社ベネッセコーポレーションのベネッセ海外留学生センターに3つのキャンパスの選定及び現地ガイドと通訳の手配、事前説明を協力いただきました。

豪州には、VET（Vocational Education and Training、豪州職業教育訓練）と呼ばれる職業教育訓練機関があり、公立と私立の機関に分けられます。TAFEは、公立の職業教育訓練機関で、豪州全土に53の施設があり、政府（州政府）によって管理・運営され、財政支援があります。大学でも、VETに基づくプログラムを提供することができ、豪州国内に大学は40あるのですが、そのうち15がこのVETの認定プログラムを提供しています。現在VET受講生の66.3%は、TAFEではなく私立の職業教育訓練機関で学んでいます。しかし、質的にはTAFEの方が整っているそうです。

TAFEでは、各業界において実践的で役立つスキルを身に付けることを目的にしています。コース内容は、多岐にわたっており、ビジネスやコンピュータなどから観光、農業、園芸、福祉など充実しています。

豪州には Australian Qualifications Framework

（オーストラリア教育資格システム、以下「AQF」）の制度があります。豪州は、連邦国家で、最初、州・区により資格枠組みがバラバラであったため、国内で就業する上で他州へ行っても資格が認められないといった事がありました。そこで、英国を手本に統一的に資格を捉えるために作られたのがAQFです。AQFは、EU内の統一規格であるEuropean Qualification Framework（EQF）や、英国の資格枠組み（QCF）、ASEANの資格枠組み（AQRF）などのNQF（National Qualification Framework）と整合性があります。

TAFEでの修業後は、AQFのレベル3や4に該当するCertificate III、IVの資格から、レベル5や6になるDiploma、Advanced Diplomaの学位が取得できます。Diploma取得後、大学を経てBachelor Degreeを取得する“Diploma-To-Degree Pathways”（通称D2Dプログラム）という接続プログラムはAQFの特徴的なプログラムです。修業年限は、大学もTAFEも共に3年で、在籍者は、2014年時点で、24歳以下が74万人に対して、25歳以上は103万人です。豪州内での社会人教育の受け皿として確立されています。

VETは、職能に基づく訓練制度が中心になっており、訓練内容はパッケージされています。このパッケージは特定の産業、産業セクター企業で労働者のスキルを評価・査定するための国の認めた基準と資格のセットです。その開発は、産業スキル委員会（Industry Skills Councils）が行い、承認します。2016年から組織が変更されていますが、基本的に産業界、国、TAFEが一体となって開発に取り組んでいます。ここで重要な観点は、企業側がこういう仕事は「出来ないといけない」、「知っていないといけない」というスタンダードスキルを作成し、それを産業界と教育側が協議していること、そしてスタンダードスキルを「時流に合っているのか」、「他にこういうスキルが必要でないか」などの検討を常に行っていることです。卒業生が仮に産業界のニーズに合っていないければ、スタンダードが書き換えられるのです。そのた

め、日本では、学業を修めたものより職業訓練修了者の給与が低いと見られがちですが、豪州では訓練修了者も高い給料の仕事に就けます。高卒後大学へ行くのではなく、TAFE を経て大学へ行く方が良いと考える人は少なくありません。技術を身に付けて、専門的な学問として学ぶのはその後で良いという考えです。学問だけで就ける仕事もありますが、技術を身に付けないと就けない仕事もあるので、前述の逆で、大学卒業後 TAFE に来る人もいます。このように、TAFE 卒業生は仕事に就く率が高い事が、TAFE を目指す利点です。留学生の受け入れも多く、留学生の 80% はアジアの学生です。

今回 3 つのキャンパスで、下記の様々なコースを見学しました。

- ・ヘアビューティーコース
- ・グラフィックコース
- ・ツーリズム
- ・ホスピタリティコース
- ・園芸、都市計画、都市デザイン & 建築のコース
- ・マッサージコース
- ・チャイルドケアコース
- ・CISCO プログラムの IT コース
- ・看護コース

それぞれの授業目的や方法、卒業までのプロセスをお聞きました。中には、世界数カ国に

ある「ル・コルドンブルー」のコースがあり、ランチやディナーを実習生が作り一般客が食べられるようにもなっていました。

キャンパス内は広く、自然豊かな環境の中にあります。各コースとも実習施設は大変広く、またカリキュラムに添った必要な設備が十分に整っておりました。特に豪州的な園芸や都市計画のコースの実習場は我々の目には大変贅沢に思えたほどです。例えば、芝生の生育と整備のために大きなグリーンがありましたが、1 年かけて完成させた後は全て枯らして次年度また 1 からスタートできるようにしていると、土木系の実習施設は雨でもできるよう室内に整備されているなど、何かにつけてスケールが大きく、実践的な設備整備がされているのが印象的でした。

教員要件も大変重要ですが、今回の視察では、ある程度の実務経験と大学における単位取得が必要であるという説明を受けましたが、詳細を聞く時間が無く帰国後の勉強となりました。

以上で、3 日目の午前は終了となり、閉講式にて受講者に修了証を交付し、今年のセミナーが閉会しました。

セミナーの内容は毎年変え、ここ数年は現場で活用できる内容も入れております。多くの方の参加をお待ちしています。



参照 1. 中村雅美「オーストラリア職業教育訓練教員の資格要件—専門技術継続教育機関 (TAFE) の高等教育段階に照準して—」、産業教育研究第46巻第1号2016年、15-22頁
2. 中村雅美、寺田盛紀「オーストラリア・TAFE の職業教育プログラムにおける資格と学位の関連—メルボルンとシドニーの事例に即して—」、産業教育学会、2016年10月23日